

---

# 昼は天使、夜は悪魔

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

昼は天使、夜は悪魔

### 【Nコード】

N9835E

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

美少女橘弥生にもうメロメロの岩尾恵一。友人達の勧めで彼女にデートを申し込むと意外にも彼女は。人の顔は一つではありません。

## 第一章

昼は天使、夜は悪魔

「可愛いよなあ」

岩尾恵一はもうメロメロだった。頭の中は彼女だけになっていた。

「本当に。何であんなに可愛いんだろう」

「御前そればかりだよな」

「だってさ」

恵一は友人達に冷やかされてもそのメロメロなまま話すのだった。

「可愛いだろ、彼女」

「まあそうだな」

「可愛いことは可愛いな」

彼等もそれは認める。

「性格もいいいな」

「大人しいし気が利くし素直で」

「だからいいんだよ」

その大柄で四角い、アメリカンフットボーラーかラグーマンみたいな姿で両手を組んで祈るように言う。本当にそれだけしか考えられなくなっていた。

「天使だよ。姫様だよ」

「何が姫だよ」

「御前眼科行つて来い」

あまりに酷いのでこう言われる始末だった。

「恋は盲目って言うがよ」

「御前は幾ら何でも異常だろ」

「異常か？」

本人には自覚はないのだった。その童顔をキョトンとさせている。

「俺は別に」

「だから異常だって」

「何でそこまでベタボレなんだよ」

彼等は口々に言う。

「しかも急に」

「何があつたんだよ」

「好きつて言われたんだよ」

「彼女にか」

「ああ、そうなんだ」

本人の言葉によるとどうもそうらしい。それで浮かれているのだ。

「この前の放課後な、いきなり校舎裏に呼び出されて」

「また随分と古典的な告白だな」

「そうだな」

告白とかではよくある話だった。それで皆その話を聞いて言い合  
うのだった。

「それで告白されたんだよ。好きですつてな」

「で、そうなつたと」

「というつと付き合つてるのか」

「ああ、そうさ」

正直に皆に答えるのだった。答えるその顔もやはりメロメロだつた。目が完全にピンクのハートマークにさえなっている。最早人相が変わっている。

「それで付き合わない奴いるか？しかもあんなに奇麗でな」

「確かに可愛いけれどな」

「それはな」

皆もそれは認めるのだった。一応は、といった感じで。

「しかしそれでもな」

「今の御前本当にやばいぞ」

「小柄で三つ編みで丸眼鏡で」

皆の言葉をよそに今度は彼女の外見について話す。

「目は大きくて奇麗だしな。唇だつて小さくて赤くて鼻立ちだつて整つてるし肌は白くて」

「美少女って言いたいんだな」

「天使だよ」

「またこれだ」

思わず仲間の一人に突っ込まれていた。

「天使だよな、あれは」

「御前さあ、天使天使って言うけれど」

「相手だって人間だぞ」

皆もういい加減うんざりしてきてこう言ってきた。恋の病も傍から見れば鬱陶しいことこの上ない。そういうことだった。

「それで何で天使だの女神だのって」

「御前彼女の性格知ってるのか？」

「純情可憐だよな」

やはり両目をピンク色のハートマークにさせての言葉だった。

「よく気が利くし真面目だし」

「つまり完璧だって言いたいんだな」

「性格は百点満点だ」

「じゃあ容姿は？」

「容姿も百点満点だ」

完全にやられていた。すっかり彼女以外見えなくなっている。

「あそこまで凄いやらないよ」

「俺ここまで言う奴はじめて見たぞ」

「俺もだ」

うんざりを越えて呆れてきていた。

「ベタボレなんてものじゃないな」

「こりやもういくところまでいったぜ」

いかれていると言いたいのだ。実際にある意味かなり危ない顔になっているのでそれは当たっていた。だが本人はそれでもよかったのだ。

「で、御前デートとかしてるの？」

だがその中で一人が彼に尋ねてきた。

## 第二章

「登下校の時とかな」

ほんの些細なデートだ。高校生によくある話だ。

「してるぞ」

「じゃあ今度は本格的なデートでもしてみろよ」

「本格的な？」

「そうだよ。休日に街に出たりしてな」

そうしたデートを勧めるのだった。そつと囁いて。

「そういうデートはしたことないだろ？一回やってみろよ」

「本格的なデートか」

「それをやってこそ本当のカップルなんだよ」

彼はこう言っつて恵一に勧める。

「だからな。今度彼女に言っつてみな」

「ああ、わかった」

恵一は彼の言葉に素直に頷いて答えた。

「それじゃあ今度の休みにでもな」

「ああ、ただし言っつておくぞ」

彼はここで恵一に忠告してきた。

「何をだ？」

「御前の趣味に合わせるなよ」

デート全体を指し示しての言葉だった。

「俺の趣味じゃ駄目か」

「彼女の趣味に合わせろ」

「こう言うのだ。」

「最初のデートでは女の子を立てるんだ。いいな」

「そういうものなのか」

「そういうものかっつて御前知らなかったのか」

実は彼が女の子と付き合うようになったのはこれがはじめてなの

だ。だからこそ舞い上がっているという一面もある。とにかく彼は今何も見えなくなっているのだ。

「そういふものなんだよ」

「そうか、わかった」

あらためて彼の言葉に頷いて答える。

「それじゃあ彼女の趣味に合わせて」

「趣味はもうわかってるよな」

「勿論だ」

好きな娘のことはすぐに何でもわかる、そういうことだ。人間好きな対象のことはそれこそどんな手段を用いても知ろうとする。彼もそうしたことでは同じでそれこそ必死に彼女のことを知ったのである。主に彼女の女友達から聞いて。その時もかなり暴走していて皆から引かれていたが。

「それこそ何でもな」

「何でもか」

「そうさ、眼鏡の好みまでな」

そこまで調べていると豪語してきた。友人達もそれを聞いてまづは納得するのだった。やはりかなり引くものがあったが。

「そうか、ならやってみな」

「ああ。まずはだ」

早速シュミレーションに入る。それと共に彼女にも声をかける。

彼女の名前は橋弥生という。この名前も彼に言わせれば可憐で最高の名前になる。とかく彼女に首ったけな恵一だった。

彼女の方はよしだった。デートの申し入れを笑顔で受ける。それもその筈でそもそも彼女から告白してはじまった交際だからだ。その相手からデートを誘われて断る。娘もまずいない。

かくしてその休み。待ち合わせ場所は彼女行きつけのアクセサリショップ。赤とピンクにそれにフリルヒラヒラの如何にもといった看板が乙女チックを醸し出している。

そこに大男が立っているというのも異様な光景だった。しかし彼

はそれでも待つていた。ここで待つてそれからすぐに店の中へ行くつもりだったのだ。彼女に合わせて。

暫くしてその彼女がやって来た。ふわふわとした草色のロングスカートに白いシャツ、淡いピンクのカーディガンだ。靴下は清楚な白だ。そしてその丸眼鏡と黒く長い三つ綱。そういったものを見ただけでも恵一はその目をハートマークにさせてしまうのだった。

「待つた？岩尾君」

「いや、全然だよ」

その大きな身体を弥生にたなびかせるようにして答える。

「僕も今来たところだよ」

「そう、よかった」

弥生は彼のその言葉を聞いてまずは微笑む。

「私自分が遅かったんじゃないかって思って驚いたのよ」

「あれ、時間は丁度だけれど」

「それでもよ」

その清らかな顔で微笑んでの言葉だった。

「岩尾君がもう来てるから。そう思って驚いたのよ」

「そうだったんだ」

「ええ。ところで」

ここで弥生は話を変えてきた。

「何？」

「この店ね、私大好きなのよ」

その顔が今度にはにこやかな笑みになる。少女そのままの屈託のない笑みだ。恵一はその笑みを見てまたメロメロになるのだった。

「そうだったんだ」

「そうなの。ここを待ち合わせ場所にしてくれて有り難う」

「ううん、ただ何となくここにしようって思っただけだから」

「何となくなのね」

「そうだよ、何となく」

こう答えるが真実は隠している。

「だから気にしないで」

「そうなの」

「そうだよ。じゃあ中に入るわよね」

「ええ」

恵一の言葉にこくりと頷いてきた。

「それじゃあ」

「橘さんはどんなアクセサリーが好きなの？」

恵一は店に入る時に弥生にそれを尋ねた。木が暮盤の目の様にガラスを入れたその扉の向こうには様々な品物が二段のテーブルや壁にかけてられているのが見える。大きい品物もあれば小さな品物もある。またそういったものを見て楽しむ女の子達の顔も見える。

「ブレスレットとかペンダントかしら」

「ペンダントが好きなの」

「そうなの」

恵一の言葉にこくりと頷く。

「銀色が特に」

「ふうん、そうなんだ」

それを聞いて納得した顔になるが実は違っていた。これも先に彼女の女友達の何人かから聞いて調べていた。だから今のやり取りは彼の情報収集からシュミレーションしての計画的なものである。ただしそれは当然ながら彼女にはあくまで秘密である。

### 第三章

「銀色なんだね」

「うん」

「絶対に似合うよ」

わかつているうえでまた言ってみせる。

「その銀色がね」

「有り難う。それじゃあ」

弥生もその気になる。その気のまま扉のノブに手をかける。引く形の大きな縦のドアノブだ。そこに手をかけたのだった。

「行こう」

「うん」

こうして二人は店の中に入る。まずはこれがはじまりだった。それからぬいぐるみショップに行って本屋に行って喫茶店でシロップをたっぷりかけたパンケーキとミルクティーを食べてそれから並木道を二人で歩いた。クレープも買って食べた。全部彼女の好きなものだ。調べに調べてシュミレーションした結果のデートコースだ。彼はそれだけ熱心にかつ周到に考えていたのだ。大柄なのに実に細かい。

そのクレープを食べる場所は公園のベンチの上。二人仲良く並んで座って食べている。

「美味しいね」

「そうだね」

恵一は弥生の言葉に笑顔で頷く。

「私莓クリームのクレープが大好きなの」

「そうだったんだ」

「パンケーキも大好きよ」

「それも言う」。

「だから今日はとても満足よ。有り難う」

「いや、お礼なんていいよ」

恵一は照れ臭そうに笑ってそれに答える。答える時にふと彼女の首のところを見る。見ればそこにはペンダントがある。あのアクセサリーシヨップで買ったペンダントだ。銀色に小さく輝いて彼女の首を飾っている。

「そんなの」

「いえ、本当に感謝しているわ」

弥生はそう言われても彼に礼を述べるのだった。

「おかげで今日はとても楽しめたわ」

「そうなんだ」

「ええ。それにしても」

ここで弥生は言葉を一旦止めてきた。

「どうしたの？」

「時間なんてすぐ過ぎるのね」

不意にこう言ってきたのだった。

「本当に」

「そうだね」

恵一はここで特に考えることなく彼女のその言葉に頷いた。

「何かもう夜なんだって」

「ねえ岩尾君」

弥生はまた彼に不意に声をかけてきた。

「何？」

「今日は遅くてもいいわね」

「まあ多少はね」

一応親には遅くなるかもと言ってある。あくまでそう断っただけであるが。

「けれどそれがどうかしたの？」

「少し。寄りたいところがあるの」

弥生の方から誘ってきたのだった。

「寄りたいところ？」

「ええ。少しだけだけれど」

またこう断ってきた。

「それでもいいかしら」

「いいけれど。それは何処なの？」

「行けばわかるわ」

まだクレープを食べているが何故か雰囲気が少し違っていているように思えた。だが恵一はそれは今彼女が俯いているせいかと考えた。やはり深くは考えなかった。

「行けばいいんだね」

「そう。そこにね」

静かにこう言うのだった。

「だから。いいかしら」

「うん、いいよ」

ここでも彼はあまり考えることなく答えた。

「橘さんがそう言うのなら」

「そう、よかった」

「よかったの」

「うん、よかったわ」

なぜか言葉の調子が変わっているように思えた。

「私も。覚悟を決めていたから」

「そうだよね、デートってはじめただけれど」

恵一はここでもあまり考えないまま弥生に答えた。

「覚悟があるよね、何をするにもね」

「そうよね、本当に」

やはり声の色が変わっていた。今度は恵一も流石に気付いた。それで彼女に尋ねた。

「何かあったの？」

「なにもないわ」

しかし彼女は言う。

「安心して」

「うん、じゃあ」

「行きましよう」

弥生がクレープを食べ終えた。すると彼女はすっとベンチを立つのだった。

「そこにね」

「うん」

やはり何か様子がおかしい弥生に戸惑いながら頷く。頷いて彼女について行くとそこは。何とホテル街だった。左右に得も言われぬ派手な看板が見える。それだけではなくホテルの建物も。お城があったり様々だ。明らかにこれまでのデートとは違う異様な場所だった。

## 第四章

恵一はそこに来てまずは啞然とした。そのうえで横にいる弥生に尋ねた。

「橘さん」

「弥生よ」

しかし彼女は答えずにこう言葉を返してきたのだった。

「弥生？」

「そう、弥生よ」

また名前を言ってきた。

「弥生って呼んで。いいかしら」

「いいの？そう呼んで」

「いいの。だから」

俯いていた。しかし声ははっきりとしたものだった。はっきりとしているがそれ以上に。何か怪しい輝きを含ませた声になっていた。恵一はそのことに何か恐ろしいものを感じだしていた。

その彼に。弥生はさらに言ってきた。

「何処がいいの？」

「えっ、何処がって」

「岩尾君が選んで」

こう彼に言うのだった。

「何処でもいいから」

「何処でもいいって。まさか」

「デートなんですよ」

彼女はまた言ってきた。

「だからよ。最後はね」

「最後はって。それは」

「私は。そのつもりだったのよ」

弥生の言葉は有無を言わせぬ感じのものになっていた。声の色が

かなり強くなっている。

「最後は。ここだって」

「そんな、僕は」

「いいわよね」

声が切羽詰ったものになっていた。

「岩尾君は」

「いいわよって」

「………私はいいの」

俯いたまま言葉を続けるのだった。

「だから」

「本当にいいの？」

「ええ」

やはり返答はこうだった。何処までも澱みも迷いもなかった。見事なまでに正直な言葉だった。疑いようがないまでに素直であった。

「だから」

「………まさかこんなことになるなんて」

それまで天使の様に清らかだと思っていたからまさかこうなるとは思っていなかった。しかしここで。その天使が顔をあげてその考えが吹き飛んでしまったのだった。

「それで何処なの？」

眼鏡を外し三つ編みを解いていた。それだけだった。しかしそれだけでもう。完全に別人だった。それまでの清楚な感じがそっくりそのままひっくり返ってそこにいたのは。妖艶な悪魔だった。清楚な天使ではなかった。

「え………」

「岩尾君に任せるから」

ぞつとする程にまで妖しい光を放つ目での言葉だった。

「何処でもいいわよ」

「そう。何処でもいいの」

「ええ」

その妖艶な顔での返事である。

「さあ。だから」

「わかったよ。じゃあ」

ここまで来て。やっと彼も決めた。決めたといってもホテルのことは知らないからとりあえず身近のホテルに顔を向けてそこに決めたのだった。

「あそこにしよう」

「ええ、それじゃあ」

「あの」

決めたうえで弥生に声をかける。

「たち……いや弥生さん」

「何かしら」

「弥生さんだよね」

「そうよ」

静かに恵一に答えてくる。しかしその声がやはり違う。同じ声なのに何かが決定的に違う。それまでの楚々とした感じではなく濡れたものだった。落ちて着いて静かなのは同じだがそれが全く違っていった。それだけで完全に別人のものに聞こえるのだった。

「それが。どうかしたの？」

「いや、どうかもしていないよ。それじゃあね」

「ええ」

何はともあれホテルに二人で入った。ホテルの中でのデートは。彼にとつては思いも寄らないものだった。

次の日。学校で彼はまだ呆然としていた。それまではもういつも目にピンクのハートマークを浮かばせていたのが今は何か虚ろだ。まるで狐が憑いた様に。

そんな彼を見て。友人達はまた彼に問うのだった。

「で、今度はどうしたんだ？」

「デートに失敗でもしたか？」

口々に彼に問うのだった。

「だったら汚名挽回でな」

「それを言うのなら名譽挽回だよ」

「いや、最後までいけたさ」

しかし彼は答えるのだった。自分の席に座り呆然としたままで。

「それはな」

「じゃあ成功だったんだな」

「ああ」

一応はこう答える。

「成功だよ。けれど」

「けれど？何だよ」

「どうしたんだよ」

「女の子ってさ」

彼は言うのだった。

「顔は一つじゃなかったんだな」

「何かあったんだな」

皆それを聞いてすぐに察した。顔を見ただけでそれがわかった。

「それで何があったんだ？」

「言ってみな。相談に乗れることなら乗るからな」

「金のこと以外ならな」

友人としての決まり文句も出た。皆何はともあれ話を聞くつもりだった。それで彼を困んで話を聞きにかかったのだった。意外と親切と言うべきか。

「だから。顔は一つじゃないんだな」

「顔が二つあったら怖いぞ」

「それは人間じゃねえだろ」

皆まずはこう突っ込みを入れた。半分以上冗談だ。

「いや、顔は一つだ」

「じゃあ普通だな」

「何でそんなこと言うんだよ」

「だからだよ。顔は一つじゃないんだな」

それでも恵一は言うのだった。こう。

「昼と夜とで」

「！？何が何だか」

「わからねえよ」

「人が変わるんだな」

彼は皆がわからないのを見てこう言い換えてきた。

「昼と夜じゃ」

「ひまわりみたいだな、何か」

「昼と夜で変わるなんてな」

「つていつか朝顔か？」

皆の言葉はここでもまだ冗談めいていた。今一つどころか全く話が読めていないからこうなっているという一面もあった。当然ここでもまだ冗談が入っているが。

「それだと」

「何が何だかわからないな、やっぱり」

「だから。女の子は昼と夜で変わるんだな」

恵一は今度はこう言ってきた。

「何かな」

「女の子っていうと」

「まさか彼女か」

「あの娘以外ないだろ」

恵一はあの娘と言う。彼がこう言うのは一人しかいなかった。

「弥生さんだよ」

「そうだよな、橘さんだよな」

「いや、ちよつと待て」

だがここで一人がふと気付いた。

「御前今弥生さんって言ったよな」

「そうだよな、今確かに」

皆も言われてそれに気付いた。かなりの変化だった。

「橘さんから弥生さんか」

「御前一回のデートで随分親密になったんだな」

「親密っていうか」

その恵一が言ってきた。

## 第五章

「何て言うかさ。つまり」

「しかし今の御前見てると」

「かなり怖いぞ」

「そうかな」

自分では自覚がない。巨体でモジモジとして話すのがかなり不気味である。顔は真っ赤で表情がはにかんでいるだけでもかなりのものがあつた。

「自分ではそうは思わないけれど」

「思えって」

「とにかく。かなり進展したみたいだな」

「答えられないけれどね」

一応はこう言う。

「まあ。その」

「ああ、その先は言わなくていい」

一人がそれは右手を前に出してストップさせた。あえて。

「それはな。紳士協定だ」

「紳士協定なんだ」

「お互いそういう話には踏み込まない」

彼はそこを強調してきた。

「それでいいな」

「うん、じゃあ」

「それでだ」68

そのうえで話を戻してきた。

「顔が二つって何なんだよ」

「そうそう、それぞれ」

「それだよ」

皆もそこに突っ込みを入れる。

「橘さんに顔が二つあるのか？」  
「だったら妖怪ポストに連絡しろよ」  
「そうじゃないよ」  
「だが彼はそれは否定した。」  
「弥生さんはれっきとした天使だよ。妖怪なんかじゃ」  
「また天使かよ」  
「いつもと同じか？だったら」  
「問題なしか」  
彼等はここまで聞いてこう思った。しかしこれは違っていったのだ。恵一はそのうえでまた言ってきたのだ。しかも正反対の言葉を。

「昼は天使だよ」

「ああ」

「けれど夜は悪魔なんだ」

「悪魔!？」

「うん、そうなんだ」

こう皆に話すのだった。

「夜はね。悪魔になるんだよ」

「天使と悪魔か」

「デビルオアエンジェル」

「エロイムエツサイム」

またふざけている奴がいた。どうにもノリが軽い。

「けれどやっぱりわからないぞ」

「夜は悪魔って何なんだよ」

「そつだよな」

皆それがわからないのだった。首を傾げることしきりだ。

「悪魔!？橘さんが」

「天使っていうのはあれだが夜は悪魔って何なんだよ」

「召還でもするのか？」

「違つよ」

話が滅茶苦茶になってきているのでそれは否定する恵一だった。どうにも周りもあまり尋常ではないものがあつたが彼もそうなので違和感はない。赤の中では紅も同じだ。

「そういうことはないから」

「じゃあ何なんだ」

「夜は悪魔っていうのは」

「昼は清楚だけれどね」

またおのろけだった。

「夜は本当に」

「何かわかつてきたな」

「そうだな」

皆ここに至つてようやく察してきた。察すると真剣さが増してくるから不思議だ。

「そういうことが」

「橘さんもか」

「あれっ、驚かないんだ」

「誰だつて同じなんだよ」

仲間内の一人がまた言ってきた。当然といった顔で。

「誰でもな」

「つていうと？」

「皆昼と夜じゃ違うんだよ」

「そうなんだ」

「そうだよ。それでも御前」

ここで彼はあらためて恵一の顔を見る。それで呆れたように溜息を吐き出すのだった。

「それでも変わらないな」

「何がだい？」

「のろけた顔のままじゃないか」

「そうかな」

「そうだよ」

その顔でまた彼に言うのだった。

「全く。呆れたってどうか何かっていうかな」

「だってさ。本当に可愛いし綺麗で」

これは変わらないのだった。やはり目をピンクのハートマークにさせている。その顔は全く変わらずにただただのろけが続いていた。

「天使でも悪魔でも。本当に」

「岩尾君」

噂をすればだった。ここで。

「ちよつといい？」

「あつ、弥生さん」

恵一は素早く声の方に顔を向けた。信じられない速さだった。

「何かな」

「今度の日曜だけね」

「うん」

今の弥生は眼鏡をかけて三つ編みにしている。天使の顔だった。

「遊園地でいいわよね」

「うん、何処でもいいよ」

相変わらずハートマークの目で彼女に応える。

「何処でも。本当に構わないから」

「そうなの。それじゃあまずはそので」

「その次は」

「それはね」

二人だけの話になる。皆はもう放っておかれた。それでも皆はそんな彼を見ながらも怒ってはいない。呆れてはいるが微笑んでこう言うのだった。

「まあそれでも」

「好きなのならいいか、あそこまでな」

「そうだな」

何だかんだで恵一を暖かく見守っていた。天使と悪魔の顔の間でとろけそうになっている彼を。温かく見守っているのであった。

昼は天使、夜は悪魔  
完

2008・5・12

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9835e/>

---

昼は天使、夜は悪魔

2010年10月8日15時01分発行